

## 人生を拓いてくれた「珠玉の言葉となみ投稿文」1969年

「こんな所へ」 なみ 第5号 1969年1月9日発行

ここは北アルプス

表銀座コースから少しはずれた「餓鬼岳」

燕岳までのにぎわいが嘘のように ひっそりとしている

高山植物が咲きみだれ 雷鳥ものんびりと えさをついばむ

彼方には槍ヶ岳が 裏銀座コースが 後立山の山々が望める

ガキ岳小屋はシーズンとは言っても 十数人が泊まっているだけ

銀座コースのはなやかさはない

だけど昔のアルプスがあるような・・・

生きた山があるような・・・

そんな感じを私に与える

みんな静かに山を楽しんでいる・・・

可憐な花と 高山蝶と 対話しているものもいる

ぼんやり遠くを見つめているものもいる

ここには頂上へ登る為 順番を待つようなバカはいない

都会の雑踏から 少しでも離れていたいという人間ばかりだから・・・

夜・・・・・・・・

みんな地図を出して 過去に歩いた山々をふり返っている

明日の天気も気にせずに・・・

みんな雨になっても楽しいんだ・・・

自然のままであるならば・・・

(60を過ぎて読み返し、餓鬼岳にまだ登っていないことを反省している。)

1969.1.29 わが詩わが旅より

- ・ 何故に旅を愛するか、何故に山を愛し、雲を愛するか。これに対しての答えはわたくし自身にもわからない。わたしはただ山が好きである。雪渓を眺め、這い松の香を嗅ぎ、深山の水を飲むことを愛するがゆゑにわたくしは山に登る。
- ・ 自然はわたしにとって最も静かなる魂の道場である。自然は言葉なき哲学である。言葉なき詩である。言葉を絶したる真理である。いかなる哲学も詩も自然の前に置かれたる時、たゞ一介の貧しき食に過ぎないものとなる。すべての書物、すべての

言葉が滅びた時、なおそこには自然の悠久さと深さとのみが遺る。

- ・ 人を愛し、人を憎み、人を憤り、人を信じ、人に絶望する者の最後に還りゆくところは自然である。自然は人を憎まない。自然はいつも人を拒まない。
- ・ 自然に親しむ心は都市生活への反逆である。正しき批判である。正しき言葉の発見である。嬰兒の心の発見である。
- ・ かつて一つの存在であったものが二つの存在に分たれた。それが男であり女である。この二つに分たれた存在は再び一つにならんことを欲して絶えず両方からたがひに働きかけている。この心の働きがすなわち愛である。
- ・ 恋愛が人間の魂のみならず、その容貌をすら改めるほどの力を持っているということとは否定することの出来ない事実であろう。
- ・ 感激なき人生は死であり、墓場である
- ・ 人間の魂の美しさに触れる時、人は愛を感じず。愛せられんことを思ふ
- ・ 暗い憂うつな人生の裡になほ一條の光を見出すものは愛せんとする心である。愛せられんとする若き心である。
- ・ 一人の女を愛することはやがてかの女をめぐっている家を愛することであり、空を愛することであり、地上を愛することとなる。一人の女のうちに見出される美と尊さはやがて人類すべてのうちに潜められた美と尊さの直感へとみちびく。だから、一人の女を愛せんとする男の心、一人の男に愛せられんとする女の心の究意は神を愛せんとする心、神に愛せられんとする心に還らなければならない。
- ・ 若き日の心は永遠に燃ゆる。愛する心に燃え、愛せられんとする心に燃ゆる
- ・ 愛せんとする心の潤る時かれの死が来る
- ・ 愛せられんとする心の眠る時かの女の小ざかしき知恵が動きはじめる
- ・ 愛のうちにのみ神の世界が生き、人間の美しき尊き世界の窓が開かれてある

卑怯（ひきょう） なみ 第6号 1969年2月6日発行

彼は断崖の上に立っていた

何処をどう歩いて来たかの、まったく憶えていなかった

「何か」に誘われるように来てしまったのだ

はるか下で砕け散る日本海の荒波をみつめながら

短かった「人生」を振り返った

それは徒労とも思われる悩みと絶望の記録だった

人間への、社会への、自分への

愛への疑問すべてが彼に重くのしかかっていたのだ

そして、社会へ順応出来なかったことへの悔いが  
彼の心にあせりとして残っていた  
彼は、何度もこの世から自分自身の抹殺を計画し  
その度、「卑怯者」と自分をののしり、今日まで来てしまっていた  
しかし、今、崖の上に立った彼には、そのような考えは微塵もなかった  
それが、一番「男らしい」とさえ思った  
ドス黒い雲は低くたれ込め、風は冷たく、強かった  
彼は、死への不安を隠すかのように目を閉じ  
二歩・三歩と前進した  
彼の体は、深い深い日本海へ吸い込まれていった。



なみ 6 号より

-----

1969.2.17 亀井勝一郎「現代人生論」より

- ・ 胸の底に秘めている一番深い思いは、決して安易な表現をとらない
- ・ 人生の根本問題は、つきつめれば愛と死より他にないといえるのだ
- ・ 死所を求むるということは、己の命を最も美しく燃焼させるところを求めるということと同じである。恋愛もしかし。
- ・ 人間というものの本質はあくまでも野獣的なものである
- ・ 愛は人生と同じように、さまざまな欲情との戦いである
- ・ 人間の心の中には神とともに悪魔が必ず住んでいる。この格闘裡に人間の生命は存続して行く。
- ・ 人生何事かなせば必ず遺恨はつきまとう。そうかと言って何事もなさざればこれもまた遺恨となる。
- ・ 人生の根本問題に即して恋愛を語らざる限り恋愛は単なるセンチメンタルな甘いものになってしまう。

1969.2.18 「現代人生論」生き方考え方より

- ・ 恋愛にも日曜日がなければならぬ。それが辛うじて永続させる方法である
- ・ 連日連夜出会うことは愛の破滅である。 串田孫一「青春の倫理」より
- ・ 愛する喜びと愛される喜びとが一緒になった時に世界の色がそこそこで鮮かに光始めるでしょう。
- ・ 心は愛することを学びつつ、悩むことを学ぶ
- ・ 愛することを、甘美な雰囲気のうちのみ学んで楽しもうとする考えは、おおよそ真面目な恋愛には不向きだ。

- ・ 何ごとによらず、すべてを忘れ、向うみずになってしまうと不安などはない
  - ・ いろいろな意味で将来を考え、自分の位置をよく見定めるために、一歩引きさがつて見るゆとりがあればこそ、いろいろな不安も生ずるでしょう。
  - ・ 何のまよいもなく、何の躊躇もなく、自分の身を投げ出すように出来たら、どんなにいいだろうと思うかも知れませんが、その前に、それが自分にふさわしい行為かどうか、それを知っている必要があります。つまり、そのことで自分が責任を持てるかどうか、それだけはよく考えなければいけないでしょう。
  - ・ あこがれる以上、それは苦しいこととは思わないでしょう。いわゆる理知的な人が、人には言わなくとも、ある一人の人を恋するとして、その仮定の上に夢を築いてみるとします。その人は、たとえ無条件に恋することは楽しいものだとは思いついていないまでも、そこから当然生ずる筈の苦しみを、知らず知らずのうちに排除して、気がついてみた時には楽園にまどろんでいる自分の姿を見つめているかも知れません。
  - ・ 愛は苦しみなしには知ることも味うことも、また成就することも出来ない
- 

**バカな話し**      なみ 第7号 1969年4月8日発行

黒い子犬が走って来た。ボクの自転車を追いかけて走って来た。ドブへ落ちた。  
可哀想になーと思ってすくい上げてやった。  
ブルブルふるえていた。寒そうだった。  
こんな可愛い犬を捨てる奴がいるんだなー、無慈悲な奴だなーと思った。  
家へ連れて帰りエサをやった。オッポをふってガツガツと食べた。  
また思った。  
こんな可愛い、なんの罪もない無邪気な犬を捨てるなんて、どえらい悪い人間だなーと。  
でも、ボクの心の中にも「人間本位の心」が巣くっているのも事実だと思った。  
現実に生れたばかりのハツカネズミをたばにして殺したこともある。  
生まれたばかりの猫を川に流したこともある。  
ノミをつぶしたこともある。  
これもボク自身の利己心によるものなのか、  
必要やむを得ずやると理屈をつけるべきなのか私にはわからない。  
ただど思っている。  
人間らしい人間になりたい。  
何とでも仲良く暮らせる人間に。  
バカな人間になりたいと。

「人間」って何だい？  
動物か？・・・サルから進化して来たのだからそれでもイイだろう  
ある人は人間を、ホモ・サピエンスなんて名付けた・・・それもイイだろう  
しかし、それでは人間にとり余り格好良過ぎるからもう少し落とそう  
理性と本能（欲望）という相対するものを内に秘める  
やっかいな生物とでもしておこう  
そのやっかいな生物が、この地球上にゴマンと存在し生活している  
彼らは、二つの目、耳、一对の手、足、一つの口、ハナ  
という同じ格好をしながらごく身近な間でしか交際が無い  
同じ電車で毎朝毎晩顔を合わせても  
ニコッともせずに通り過ぎて  
同じ人間でも、同じ年頃でも、同性でも仲間という  
意識など毛頭なく終わってしまう  
これでは、同じ地球上に生活する我々人間にとり、  
余りに無味乾燥としてはいないだろうか？  
同じ人間なら、仲良く、楽しく生活して行きたいと思うのが本能だろう  
そして、この社会を少しでも暮らしやすくしたいと思うだろう